

4. 大学との連携を生かした特色ある中高一貫カリキュラムの実践

(1)心の教育：「ソーシャルライフ」について

中 村 明 彦・今 村 敦 司

<概要>第1年次研究開発実践報告書より抜粋

本校の研究開発の大きな柱の一つである青年期の「キャリア形成」の中には、「心と身体教育」が位置づけられている。これは、中高一貫カリキュラムの中に、「自分のことを良く知り、自分の将来を主体的に探り、実践していこうとする態度」を身に付ける教育を実践するにあたり、自分の心と体の健康や自分の考え方、集団や社会との関わり方についてを学習する機会を設ける必要から、名古屋大学教育学部教授の吉田俊和先生に相談し、この授業を学校の現場で、ものや人の見方、考え方を体験的に感じ、考える場を提供するという主旨で設定することになり、中学1年の実践は、昨年に引き続き2年目を実施し、中学2年の実践は本年度から実施された。

大学との連携の面では、このソーシャルライフの授業の創設時より関わっていただいた、名古屋大学教育学部教授の吉田俊和先生が主催した研究スタッフ（院生及び他大学の先生）が各授業の構成立案・企画を行い、本校教員との打ち合わせ・学習会において、実施検討され、本校教官により実践されるという企画（大学）→実践（附属学校）の繋がりが挙げられる。この形は昨年度より継続されている。（ただし、中学1年の授業者に関しての変更や中学2年生での新たな授業展開に関しては以下で説明。）

中学1年

ねらい

学校教育の中で種々の体験的な学習をすることにより、自分、身近な他者、学級、学校、社会に目を向けさせ、考える能力を刺激する。生徒に様々な刺激材料を提供し、自分たちの行動を通して、「人間」や「社会」に対する考え方の基礎を養わせる。そして、結果として社会的コンピテンス（対人関係能力、社会や集団への自立対応力など）や社会志向性を高めるような授業プログラムの開発を目指している。

学年の目標

教育心理学や社会心理学の知見をベースにした体験的学習により、自分と他者、自分と集団・社会との関わり、集団内のトラブルにどう対処していくのかを考えさせる。

授業について（昨年度との変更点）

毎時間の指導案・細案は昨年度実施された授業を元に、大学の研究スタッフによって改めて検討された。3ヶ月に1度の事前学習会〔2回から3回分の授業の打ち合わせ(学習会)〕を中学1年担任団と行い、授業展開・授業キット作成に対する話し合いを含めて実施可能かを検討した。この学習会により、本校教官によるソーシャルライフの実践への手続きを引き継ぐことができた。昨年度との違いは、この点(本校教官がソーシャルライフの授業を行うこと)である。

授業は、土曜の1・2時間目の110分で立案されている。50分刻みを意識しないで、一区切り付けたところで休憩をはさむ形を取っている。授業を行うのは、学年担任団の中の担任以外の者が主として実施し、担任は自分のクラスでサポートとして関わっている。担任は実施者という立場ではなく、全体をサポートしクラスの生徒把握の場面として利用している。

授業経過

第1回「記者会見ゲーム」（4月9日）

・新しい仲間との出会い、各生徒がお互いどのような人なのかを知る機会として入学してすぐの時期に実施。生徒それぞれのいろいろな情報を入手する機会を記者会見というゲームにすることにより、他者理解やクラス内の友達関係の形成を促す。

第2回「記憶」（4月21日）

・「記憶の不正確さ」や「記憶の曖昧さ」を体験を通して理解することをねらいとする。題材としては視覚刺激において日常意識せずに、見ているもの（例えば信号機の色や順序など）や聴覚刺激としては、日常会話の中での伝言ゲームを利用する。体験を通じて記憶し思い出すときに犯しやすい誤りや記憶の不

正確さについて理解を深めさせる。

第3回 「物を見る」（5月19日）

- ・「物を見る」ということに着目し、錯視図形を用いて、実際はそうではないのにそう見えてしまうことの不思議や、物を見る、見え方は一つだけではないという事を体験から気付くようにさせる。同じ物でも、見方を変えれば、異なって見えることに気付かせる。

第4回 「出来事の見方」（6月2日）

- ・第3回の「物を見る」ことから発展させて、人の行動や出来事も見方・見え方は一つだけではないことを体験させる。例えば、4コマ漫画の組み合わせにより様々なストーリーが出来ることを体験させる。

第5回 「帰属その①」（6月16日）

- ・ある出来事から推測される理由が、手に入る情報によって異なってしまうことを体験し確認させる。偏った情報が与えられると全く異なった理由を推測してしまうことも体験させる。さらに、これまでは「全体を見ることが重要だ」ということを主張してきたが、日常生活では「全体を見ることがむずかしいこと」を確認させる。結果として偏った情報から判断している可能性があることを気付かせる。

第6回 「モラルジレンマその①」（7月7日）

- ・5回までの授業では「人間・社会の多様な観点から考える能力」を刺激した内容であった。今回は、能力の刺激のみならず今までに刺激・習得された能力を実際に利用する力を養わせる。また、多様な考え方を持つ人と共に話し合うことの大切さを理解させる。

第7回 「良いところ探しゲーム」（9月29日）

- ・半年を一緒に過ごしてきた友達（クラスメイト）には、自分の知っているところもあれば、まだ、知らない部分もたくさんあることを理解させる。人を知ることがは難しく、一部の情報だけで人を判断していることに気付かせる。

第8回 「印象形成」（10月6日）

- ・情報から自分で印象を作り上げてしまうことを取り上げる。印象形成というのは、対人関係においても重要な事柄であり身近な問題として取り上げることが出来る。偏った情報から偏った印象を形成する可能性があることを体験させる。また、全ての情報を入力することの困難さや、印象には正解がないことなどを理解させる。

第9回 「頼み方スキル」（10月20日）

- ・頼みたいことを具体化させる重要性を体験的に気づかせる。頼み方のすきまの習得に向けての練習をさせる。

第10回 「断り方スキル」

- ・「断り方のスキル」についてスキル教育を行う。同時に認知的側面への理解を深めさせる。

第11回 「頼む・断るスキルの実践と応用」

（12月15日）

- ・「頼む・断る」スキルの練習を行い、スキルの発揮が困難な場面を経験し、他者の気持ちや状況を理解する事の重要性和難しさや同時にはっきりと自分の気持ちや状況を伝える大切さに気づかせる。

今後の課題

研究開発2年次より、本校教員がソーシャルライフの授業を担当したことによる、成果と課題を明らかにし次年度につなげる取り組みとしたい。

（文責：中村明彦）

中学2年

この学年担任団は、昨年度から引き続き、名古屋大学教育発達科学研究科の吉田俊和教授を中心とした研究グループとともに、ソーシャルライフの授業を行ってきた。この授業の3年間の目的は、「人間・社会を考える能力を刺激する」ことであり、中学1年生では、個人の知覚や認知、思考に関わる様々な特徴や、それらが他者に及ぼす影響などを中心に学習してきた。中学2年生では、個人や目の前の他者という狭い範囲ではなく、さらに広い範囲に対して意識したり、目を向けられるようになることを授業目的としている。

授業は、A、B組同内容、同時進行で、年間10時間（土曜3、4限を、5、6、10、11、2月の5回）行った。それぞれの授業は、昨年と同様、事前に大学教官、院生、本校教官による打ち合わせを行い、当日は、院生が授業を行って本校教官がサポートに回るという流れを変えていない。ここでは、それぞれの授業の目的と内容について述べることにする。

第1回授業 「目に見えない人の存在まで意識する」

（2001年5月19日土）

目的 多くの人の存在に気づくことができるようになり、目に見えない他者の存在にまで意識を向けることが重要であることに気づくこと

内容 コンビニの前で遊んでいる若者が多数いる絵を見せ、個人で、どれだけの人にどのような影響がでるか考えさせ、発表する。自分で考えていたのでは考え方の幅が狭いことを感じさせた後、6グループに分かれて、2グループずつ同じ絵（電車の中で騒ぐ人、自転車置き場に並べない自転車の絵、ハイキングで勝手に近道をする人の絵）を見せる。それぞれのグループで、影響のある人とそ

の理由を考えさせ、グループ対抗で影響のある人とその理由を発表し合わせる。又、発表後にさらに他の考えがある生徒に意見を言わせる。そして、影響を及ぼす範囲は多様であることを確認する。

第2回授業 「他者の気持ちや考えを推測する」

(2001年6月16日土)

目的 1年生の時にに行った「立場の違いによって見方が違うこと」の再確認と、他者を理解する際には他人の立場に立つことの重要性を知ること、多様な視点の取得

内容 教卓の上に置いた三つの積み木が、教卓の前と横の先生にどのように見えるかを、それぞれ絵に描かせる。これで、それぞれの先生の位置に立つと絵を正確に書くことができることを体験させ、他人の立つ位置に自分が立つことの重要性を認識させる。次に、「車に犬をはねられた子供のところに郵便屋さんが車のおもちゃを届けたところ、その子供は泣き出した」という漫画を見せ、郵便屋さんはなぜその子供が泣いていると思ったかを考えさせる。郵便屋さんは、犬が車にはねられたことを知らないで、「車に犬がはねられたから」という答えは成り立たないことをおさえる。次に、クラス担任と大学教授に同じ質問をして、その答えを予測させる。どちらが予測しやすかったかを感じさせ、知人ほど予測しやすく、知らない人の考えを予測することは難しいと言うことを体感させる。最後に、グループを作り、友だちに質問をしてその答えを予想させ、よく知った人でもなかなか正解はでないことを体感させる。最後に、前回出したコンビニ前に若者が多数いる絵を見させ、それを見た人がどのような気持ちになるか考えさせる。このことによって、他人の立場に立つて物事を考えることの重要性を認識させる。

第3回授業 「グループとして知覚する心理」

(2001年10月6日土)

目的 ものや人の集まりを見るときの人の特長を知ること

内容 1年生の時に見せた「少女と老婆」の絵をもう一度見せ、自分の思考を客観視する練習をさせる。次に、顔にもネズミにも見える図を、一方の列には顔がいっぱい描いてある絵の中に入れ、もう一方の列には動物がいっぱい描かれている絵の中に入れて、何に見えるか考えさせる。ここで、人は、どちらにも見える絵を、グループとしてまとまりある意味づけをして見てしまうことを体感させる。

る。さらに、点だけで構成された絵を見せて、全体で犬を描いたように見えることを体感させたり、白丸と黒丸が交互に二つずつ並んでいる絵を見せたりすることで、人は知覚にあるものをまとめてみる傾向があることを体感させる。最後に、多様な職業の人が載っている絵を見せ、グループが多様にできることを体感させ、人の分け方の複雑さを理解させる。その上で、人を見る眼について次回学習することを確認する。

第4回授業 「ステレオタイプに基づいた認知」

(2001年11月17日土)

目的 世間に広く流布していて、あるグループに所属する人は、そのグループに共通すると思われる特徴を持つと考えられる「ステレオタイプ」的なものの見方があることの意識と、様々な意見を持った集団で物事を考えることの重要性の認識

内容 50歳の男性の子供(小学6年生)が大けがをして救急病院に運ばれ、手術を担当した「ドクターミス」がその子の顔を見たら、自分の子供であったという話を聞かせ、ドクターミスと50歳に男性と、子供の関係を考えさせる。ドクターミスが女であるという考えが浮かぶにくいという体験をさせ、医者という職業がそのように考えさせがちにしていることを理解させる。そのような他の例を考えさせた上で、ステレオタイプの考えにはまらないための予防策を考えさせる。次に、演劇監督をしている自分が、本番直前に大胆な変更をするかどうか自分の態度を決め、その理由を含めてシートに記入する。次に、「挑戦派」と「安全派」に分けたグループで話し合わせ、その結果と自分の最初の解答との違いを比較させる。同じような意見の人達だけで話し合いをすると、意見が偏ることを体感させ、様々な意見の人と話し合いをすることの重要性を認識させる。

第5回授業 「まわりのひとに合わせる」

(2001年2月2日土)

目的 集団の中では「まわりの人に合わせる(同調)」現象があること、それは「自然」で社会情緒的効果を持つことと同時に危険性を持つことを知る。

内容 まず最初に、絵を描くのに、完成間近なときに大幅な変更をするかどうか自分の態度を決め、次にグループで話し合い、全体でディスカッションをして説得力のある意見を言った班が勝ちとするゲームをする。次に湾曲した紐を見せ、その長さを一人ずつ順番に言わせるゲームをする。ひもの長さを当てさせるゲームでは、後班に答えを言う

(1)心の教育：科目「ソーシャルライフ」について

生徒の答えのばらつきは、前半よりも小さくなっているという結果を提示して、人は無意識に他の人に会わせたい考えを持つようになることを知る。更に、アッシュとシェリフの実験の話をして、このようなことは自然に起こることであると確認する。また、最初に行ったディスカッションでは、意見をまとめるために最初バラバラだった意見がだんだんとまとまっていく過程があったことに気づかせ、同調がもたらす結果についての考察へとまとめる。まとめでは、同調はネガティブな面とポジティブな面の両方があることを知り、自分が同調を気づいたり、防いだりするには、同調のメカニズムについて良く知っていることが大切であると言うことを確認する。

流 その2

- 1月 仲間との交流の中で、体に気づき、体を調整する感覚の発見 その1
- 2月 仲間との交流の中で、体に気づき、体を調整する感覚の発見 その2 (文責：中村明彦)

今後の課題

来年度の課題設定と生活指導の関連、効果の測定など、行わなければならない課題は多く残っている。効果的に年間5回(10回)継続指導をするための方法も考えなければならない。(文責：今村敦司)

高校1年

(1)授業の目標

高校1年生のソーシャルライフは、ヒューマンプログラムの中に位置づけられていることを中学校より意識した扱いで行うものである。心の教育はソーシャルライフの授業だけでなく学級活動も含めた広い範囲での実施をめざし、学校という小さな社会、または一般的な大きな社会の中での自分の存在を意識し、自分の模索をして、対人関係に関する社会的能力の育成を目指すことである。

新しい仲間と心を開いて、思いやりのある開かれた対人関係ができるようにしたり、新しい仲間と如何に共生していくかが課題である。

(2)予定

カリキュラムの中では体育の授業に含まれているので、運用は体育の時間内で必要に応じた形での実施となる。

予定としては、月に1回のソーシャルライフ特別時間となる。

- 4月 } 林間学校に向けて、学級活動の話し合い等の時
- 5月 } 間としての利用 2回～3回
- 6月 薬物依存と戦う体験談を聞く
- 9月 ストレスマネジメントによる、自己再発見
- 10月 構成的エンカウンターを利用した本音の感情交流 その1
- 11月 構成的エンカウンターを利用した本音の感情交